「日々の理科」（第 2736 号）　2022,-1,10

「東京の雪（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

東京では、降雪時にも気温が氷点下ではないことが多い。上空で形成された雪の結晶の一部が融けて、地上に達するまでに結晶同士がくっついてしまうことが多い。いわゆる「ぼたん雪」である。しかし、特に「雪の降り始め」は、空中を落下する結晶量そのものが少ないので、きれいな結晶が見られることもある。

観察は簡単で、色の濃い布や画用紙に落ちた雪の結晶が、融けないうちに虫メガネで見ればよい。デジカメやスマホでの撮影も可能だ。

東京に降る雪の結晶なんて大したことはない、と思ったら大間違いだ。写真は降り始めに捕獲した結晶である。一部は欠けているものの、典型的な「樹枝六花」の特徴を持っている。

これも美しい。「枝付星状正規六花」というやや稀な結晶で、腕の１本は更に枝分かれしている、複合結晶でもある。

これは「雲粒付六花」と呼ばれる結晶である。結晶全体に、霜のように小さな氷のつぶがついている。実際に雲の中で、雲粒（霧粒）がついて凍り、このような姿になったものだ。小さな雪の結晶にも、「成長の履歴」が記録されていて、それを読み解くのが面白い。

今回、小石川で撮影した雪の結晶写真の中でも「最優秀賞」の作品である。この「天からの芸術品」は、撮影後数秒で水滴になり、やがて蒸発してしまった。